

第五章

結論

第五章 結論

5-1 本研究の結論

5-1-1 目的1の結論

目的1：「傘の貸出し実施団体の把握」について

貸出し実施団体の特徴について、主に以下のことが明らかになった。

- (1) 121の傘の貸出し実施団体を抽出。企業が最も多く46%を占めていた。
- (2) 貸出しを行っている目的でもっとも多いものは、「サービス」に関することであった。
- (3) 2009年からおよび6月からの貸出しが多く、開始から5年未満の団体が69%を占めている。
- (4) 貸出し方法は自由に貸出す団体が81%と多くを占めており、返却期限については、期限付きと期限なしが約半分ずつとなった。
- (5) 91%の団体が無料と表示された。そのためか、返却特典を設けている団体は8件のみであった。
- (6) 貸出す傘の元手は、新品と再利用が半分半分となり、傘に特徴がある団体は8割弱である。
- (7) 58%の団体は、傘の貸出しを行う上で費用がかかっている。
- (8) 「返却率」向上が大きな課題である。返却に関する問題を全体の46%の団体が挙げている。
- (9) 貸出し回数（全体の43%）および「返却率」（全体の27%）を把握していない団体が多く存在した。

上記の9点について、以下に示す。

インターネット調査で団体を把握したためか企業が多くなった。企業が多いということもあり、施設利用者へのサービスを目的として実施している団体がもっとも多い結果となった。開始して5年目までの団体が63%を占めているということで、継続することが難しいと言えるだろう。貸出し方法は、情報を記載する団体もいくつかあったが、団体にとって負担の少ない自由な貸出しがほとんどを占めていた。ほとんどの団体は無料で貸出しを行い、返却特典を設けていなかった。サービスで行っている団体が多いため、このような結果となったのであろう。ほとんどの団体が、傘に特徴を付けている中で、団体の利用者だということが分からないように、あえて印をつけていない団体もあった（パチンコ店など）。貸出しは、サービスや善意など金銭を稼ぐ目的ではない団体がほとんどであるのにも関わらず、貸出しを始めるにあたって費用がかかっている団体が58%にも及んだ。調査した中で、団体が困っている点は、返却に関することがもっとも多く46%占めていた。「返却率」を向上させることが傘の貸出しにとって、最大の課題と言えるだろう。

「返却率」に影響を与える項目について、以下のことが明らかになった。

- (1) 交通機関の貸出しは「返却率」が低い。
- (2) 貸出しの際、情報記入している団体は、「返却率」が高い。
- (3) 返却期限を設けている団体は、高い「返却率」であった。返却期限がある団体の中でも、次回利用時に返却という団体については、5団体中4団体が低い「返却率」であった。
- (4) デポジット制度を採用している団体は、共に非常に高い「返却率」であった。
- (5) 貸出し回数の少ない団体は「返却率」が高く、貸出し回数の多い団体は「返却率」が低い傾向にある。
- (6) 常備数の少ない団体の方が、「返却率」が高い傾向にあり、反対に、貸出し数の多い団体は、「返却率」が低くなっている傾向が強い。

上記の6点について、以下に示す。

「返却率」に影響を与えている項目として、業種、貸出し方法、返却期限、料金制度、貸出し回数、傘の常備数が挙げられた。交通機関で行われている貸出しは「返却率」が低い結果となった。駅などの貸出しは、自由に貸出している場合が多く、管理されていないため「返却率」が向上しないのであろう。貸出しの際に、氏名や住所を記載している団体は、「返却率」が高いものとなった。「返却率」は向上されることができが、団体の手間も増えてしまう。また、返却期限を設けている団体も「返却率」が高い傾向にあった。しかし、返却期限の中でも、次回利用時に返却というあいまいな返却期間の設定を行っている団体に関しては、ほとんどが低い「返却率」となった。さらに、デポジット制度という金銭を必要とし、傘の返却時に金銭も返却されるシステムに関しては、2団体のみであったものの共に非常に高い「返却率」となっている。貸出し回数の少ない団体は、「返却率」が高い結果となった。逆に、貸出し回数の多い団体は、「返却率」が低い結果となった。同様に、常備数の少ない団体は「返却率」が比較的高く、常備数の多い団体は「返却率」が比較的低い結果となった。常備数の少ない団体の方が、傘の管理を行いやすく「返却率」が向上したのかもしれない。

5-1-2 目的2の結論

目的2:「駅における傘の貸出し利用実態の把握」について

愛の置き傘の貸出し状況について、以下のことが明らかになった。

- (1) 自由な貸出しであり、補充も行われていない。
- (2) ほとんどの駅で、清掃員によって傘立てが清掃されていた。

上記2点について、以下に示す。

愛の置き傘は、第二章で調べた傾向でも多かった自由貸出しである。団体は、初期に傘や傘立ての準備などを行い、現在は補充が行われていない。7駅中6駅は、清掃員によって傘立ての清掃が行われていた。

貸出し利用実態について、以下のことが明らかになった。

- (1) 今回の調査した 28 日間で存在したすべての傘は 1118 本であり、傘の種類の内訳は、ビニール傘が 54%、その他傘が 40%、折りたたみ傘が 6%となった。
- (2) 今回の調査した 28 日間での貸出し回数は 929 回であった。
- (3) 各回の貸出し投入比では、100%を超えることが何度かあり、貸出しされた傘とは異なる多くの傘が投入されていることが分かった。
- (4) 貸出し回数の多い駅は、大和田駅、香里園駅、寝屋川駅の順番であった。
- (5) 返却率は 5%と非常に低い値となった。
- (6) 返却までの平均日数は、4 日となった。

上記の 4 点について、以下に示す。

傘の種類は、ビニール傘が半分以上を占めていた。貸出し投入比は、とても高い値となった。これより、貸出された傘とは異なる傘が多く投入されていると言える。誰かの寄付があつて貸出しが成り立っているのだろう。貸出し回数の多い上位 3 駅は、共に傘立ての補充可能本数が多い駅である。傘立てを大きくすることによって、貸出しが増える可能性がある。返却率に関しては、5%となり第二章で述べた団体の平均に比べ、非常に低い値となった。返却までの平均日数に関しては 4 日となり、必ずしも借りた次の日に返却されるということではないことが分かる。

寄付の傘の存在について、以下のことが明らかになった。

- (1) 寄付している団体および個人が存在する。

上記の点について以下に示す。

今回の調査中、寄付を感じさせるほど傘が増えることが何度かあった。中には、傘に団体名を記載した上での寄付や個人の方による不要な傘の寄付なども存在した。

5-1-3 目的 3 の結論

目的 3：「駅における傘の貸出し拡大の可能性を見出すこと」について

調査結果の傾向について

- (1) 存在本数がなくなることがあり、貸出し可能の傘があれば、貸出し回数が増えた可能性が高い。
- (2) 天気予報通りでも外れていても、雨が降ると貸出しが増える。
- (3) 昼間のみの雨については、貸出し回数はあまり伸びない。

上記の 3 点について、以下に示す。

調査の中で、存在本数が無くなることが何度かあった。常に貸出し傘が存在していれば、より多くの貸出しが行われていただろう。本数の拡大が有意であると言えるだろう。

天気予報と比較し、貸出し回数の傾向を見たが、天気予報とはあまり関係なく雨が降れば、貸出しが伸びていた。しかし、昼間のみの雨に関しては、それほど貸出しされていない

かった。昼間は、駅の利用者も少ないため、このような結果になるのだろう。

天気パターンについて、以下のことが明らかになった。

- (1) 1日中晴れの日でも、貸出しが平均 20.1 回されている。
- (2) もっとも平均貸出し回数が多い天気パターンは「夜のみ雨が降る⑤」である。
- (3) 2010 年の推計年間貸出し回数の合計は、11218 本である。平均では 1 駅年間約 1600 回の貸出しとなる。
- (4) 駅別の推計年間貸出し回数は 2502 回で香里園が最も多かった。もっとも少ない駅は、門真市で 420 回であった。

以上の 4 点について、以下に示す。

貸出しを必要としないであろう晴れの日も貸出しは行われていた。このことから、雨に降られた時だけでなく、傘が必要だと感じた時にも傘が持ち出されていると言えるだろう。もっとも貸出し回数の多い天気パターンは、「夜のみ雨である⑤」であった。朝は降雨が予想できない状態で傘を持たず、会社員や学生の帰宅時に雨が降ることで、貸出し回数が大きく伸びたのであろう。2010 年を対象として、推計年間貸出し回数を算出すると、11218 本であった。この回数が行われれば、不必要な傘の購入を大幅に減らすことができるであろう。駅別に考えた際は、もっとも利用の少ない門真市駅においても 420 回の貸出し回数が見込まれ、420 本の不必要な傘の購入を減らすことができる。

愛の置き傘と沼袋アンブレラハウスの会との比較により、以下のことが明らかになった。

- (1) 沼袋アンブレラハウスの会の貸出し回数は、1 駅あたりの愛の置き傘推計年間貸出し回数よりも大幅に多い。
- (2) 沼袋アンブレラハウスの会は、自由貸出しにも関わらず返却率が 30%以上である。管理している成果と言えるだろう。
- (3) 管理が行われていない愛の置き傘が持続できているのは、傘が寄付されているからであろう。

以上の 3 点について、以下に示す。

沼袋アンブレラハウスの会では、管理が行われ傘が無くなることはなく、利用者が借りたい分だけ貸出し可能となり、貸出し回数が伸びていると予想される。また、沼袋アンブレラハウスの会は、管理されているということで、返却への意識が高まり自由貸出しにも関わらず返却率が 30%以上になったと予想される。管理がほとんど行われていない愛の置き傘が持続できているのは、貸出された傘とは別の傘が補充されているからであろう。よって、このまま貸出し投入比を維持したままで、貸出し回数を増やすことができれば、愛の置き傘は優良な貸出しとなるだろう。

貸出し回数に影響を与えている要素について、以下のことが明らかになった。

(1) 貸出し回数には、補充可能本数および存在本数が影響を与えていると考えられる。以上の点について、以下に示す。

上記でも述べたように貸出しの需要は多く、もっと補充可能本数および存在本数が多ければ、貸出しが伸びるようだ。よって、傘立てを大きくしたり、傘立て置場を増やしたり、管理して存在本数を増やすことにより傘の貸出しを拡大させることができるのではないだろうか。

5-2 研究全体を通しての考察

調査した中で、団体が困っている点は、返却に関することがもっとも多く46%占めていた。「返却率」を向上させることが最大の課題と言える。貸出し実施団体が実施できる「返却率」を向上させる方法として考えられることが、貸出し方法で氏名や住所を記載すること、明確な返却期限を設けること、デポジット制度を用いること、常備数を必要以上に増やさないことの4点が挙げられる。しかし、これらはいずれも貸出し実施団体の負担を増やしてしまう方法である。よって、貸出し実施団体にとって無理のないよう4項目のいくつか取り入れることが現実的であろう。

今回実施した愛の置き傘利用実態調査の中で、存在本数が無くなることが何度かあった。沼袋アンブレラハウスの会では、管理が行われ傘が無くなることはなく、利用者が借りた分だけ貸出し可能となり、愛の置き傘に比べ貸出し回数が伸びていると予想される。よって、常に貸出し傘が存在していれば、より多くの貸出しが行われていただろう。貸出し回数の拡大方法として、存在本数の拡大が有意であると言えるだろう。よって、管理することが拡大への方策と言えるだろう。また、愛の置き傘利用実態調査の結果より、傘立ての補充可能本数の多い駅のほうが、存在本数が多い傾向にあった。よって、傘立ての補充可能本数を増やすこと、傘立て置場を増やすことも、拡大への方策と言えるだろう。

2010年を対象として、7駅合計で推計年間貸出し回数を算出すると11218回であり、この分不必要な傘の消費を大幅に減らすことができるであろう。また、1駅の平均では1600回であり、約81250個所の駅で実施されれば、年間1億3000万本の傘の消費をなくすことができると考えられる。

以上のような方法で傘の貸出しを広めることで、傘を所持していない日に、雨が降る度傘を購入するという流れをなくしたい。傘はどの場所でも借りられるということが常識となることを願っている。

5-3 今後の課題

本研究では、貸出し実施団体の協会がなくインターネット調査を行ったため、実際の貸出し実施団体すべてを把握することができなかった。地域を定め、対象（駅など）を決めることでもう少し詳細の貸出し実施団体を把握することができたかもしれない。

愛の置き傘の調査については、1日2回と限られ、かつ不定期的な調査であったため、すべての貸出しを把握できていない。調査間の貸出しを把握するために、24時間管理のできるカメラ撮影などができるとより良いと考えられる。また、傘がなければ利用したくても利用できない人が発生してしまうため、別日程の調査で傘の補充を行えば、正確な貸出し回数を把握できただろう。

返却された傘が大量に増えた調査が何度かあり、そのことから傘を寄付されている人がいることが明らかになった。しかし、24時間管理していたわけではないため、誰が寄付しているかは少ししか知ることができなかった。寄付者を把握することも課題である。

天気パターンの平均日数を割り出す際、利用実態調査のデータが1日のみである天気パターンが存在した。それでは、正確なデータとは言い難いため、より調査日数を増やしデータ数を増やすことで正確な天気パターンによる貸出し回数を見出すべきである。

本研究では、アンケート調査を十分に行うことができなかった。アンケートを実施し、利用者の意見を聞くことができれば、貸出し団体にとっても利用者にとってもより良い傘の貸出しを見出すことができるのではないだろうか。